

学童期の発達障害児の行動に対する見方

松山 郁夫*

Awareness of behavior of children with developmental disorders in school age

Ikuo MATSUYAMA

【要約】学校教育において発達障害児に対する指導体制の構築をするためには、教師の発達障害児に対する認識を検討しておくことが求められる。本研究の目的は、小学校の教師が担当している発達障害児をどのように見ているのかを考察することとする。このため、学童期の発達障害児の行動に対して教師が意識していることを記述してもらい、その内容を検討した。その結果、障害特性に関心を向けていること、障害特性を全般的に捉えようとしていること、及び子供の長所を捉えようとしていること等が明らかになった。

【キーワード】学童期、発達障害児、発達障害児の行動、障害特性、教師

I はじめに

発達障害については、発達障害者支援法に「自閉症、アスペルガー症候群、その他広汎性発達障害、学習障害、注意性欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であって、その症状が通常、低年齢において発現するもの」と定められている。

文部科学省は2002年に、「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国調査」と題して、学習面、行動面（「不注意」または「多動性－衝動性」と「対人関係やこだわり等」）の著しい困難に関する調査を実施した。対象としたのは、全国5地域の公立小学校（1～6年）及び公立中学校（1～3年）の通常の学級に在籍する児童・生徒41,579人で、学級担任と教務主任等の複数の教員が判断した上で回答するように依頼した結果、発達障害の出現率を6.3%と報告している¹⁾。さらに、文部科学省は2012年12月に、特別支援教育が開始されて5年が経過し、通常の学級に在籍する児童生徒において、知的発達に遅れはないものの、発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒の実態を明らかにし、今後の施策や教育の在り方を検討するために、「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」を発表した。これは、2002年の調査と同様の内容で、岩手、宮城、福島の3県を除いた全国的な状況を調査したものである。その結果、通常学級に在籍する公立小・中学生の6.5%が発達障害の可能性があった。これを基に推計すると、約61万4千人になる。したがって、小中学校の児童生徒の16人に1人は発達障害ということになり、出現率が非常に高い障害と言える。

*佐賀大学文化教育学部

これらの調査に対する回答は、担任教員が記入し、特別支援教育コーディネーター、または教頭或は副校長の確認を経ている。発達障害の専門の心理・教育などのチームによる判断がないため、発達障害の児童生徒数の正確な割合ではない。また、医師による診断はなされていないため疫学調査ではないが、以下の報告がなされている。

学習面で「読む」「書く」「計算する」「推論する」などで著しい困難を示す「学習障害」は4.5%、行動面で「不注意」「多動性—衝動性」が著しい「注意欠陥多動性障害」は3.1%、対人関係やこだわりなどの問題を起こす「自閉症・アスペルガー症候群」は1.1%で、一部ではこれらが重複していた。また、校内委員会で特別な教育的支援を必要と判断されていないが、約8割の学校で担任の努力や指導の工夫などで済まされていた。いずれの支援もなされていない学校が8割強であり、約4割が支援を必要としていた。このため、具体的な個別指導、座席位置の配慮、コミュニケーション上の配慮、習熟度別学習の実施、個別の課題の工夫など、適切な指導をする必要があるとされた²⁾。

この調査の協力者会議の座長を務めた全国特別支援教育推進連盟理事長の大南は、「国や教委に求められる施策としては、通常学級の小規模化、複数教員による指導方法の工夫改善。早期の対応、専門家チームの設置、巡回相談の実施、関係機関との連携、教員養成の検討、教員研修の充実などが重要」、「学校に求める児童生徒の支援では、校内委員会の機能の推進、校長の責務、学校全体の指導推進、授業改善などが必要」と指摘している³⁾。

以上のことから、学校教育における発達障害児に対する指導体制の構築が求められる。そのためには、教師における担当する発達障害児に対する認識を明らかにする必要がある。したがって、本研究の目的は、小学校の教師が担当している発達障害児をどのように見ているのかを考察することとする。

II 方法

2012年度に行われた発達障害児への接し方に関する研修会に参加した、小学校の普通学級、或は特別支援学級において発達障害児を担当している11名の教師に対して質問紙調査を行った。質問紙調査票に、発達障害児の状態に対して関心を向けて見ていることを、思いつく範囲で「気になるところ」と「良いところ」に分けて、箇条書きで記述してもらった。その後、記述された文章のうち、内容が同じものを分類し、その内容を検討した。なお、倫理的配慮としては、事前に、記述した内容を発達障害児に関する研究に使用する際、記述内容に関しては分類して分析するため、個人のプライバシーは保護されること、及び学校にも一切不利益がない旨を説明し、全員から同意を得ている。

III 結果

学童期の発達障害児の「気になるところ」に関しては、すべて障害特性について合計74(60.2%)の記述がなされていた(表1)。それらの内容は、①すぐ泣く、行動が衝動的、すぐ帰ると言い出す等の「不安定な行動」(12の記述:16.2%)、②余計な一言が多い、その場の雰囲気を読めない、話を集中して聞くのが苦手等の「状況に応じた行動の困難さ」(12の記述:16.2%)、③人に対する執着がある、目を合わさない、叩いたり触ったりして手を出す等の「情緒・対人関係の問題」(11の記述:14.9%)、④字形が整わない、書く文字に特徴がある、書いた文字を読み取ることができない等の「学習の困難さ」(9の記述:12.2%)、⑤こだわりすぎるため融通が利かない、こだわりが強い、頑固等の「こだわり行動」(8の記述:10.8%)、⑥落ち着きがなく多動、待つことができない、集中力がなく手まぜばかりしている等の「注意の問題」(6の記述:8.1%)、⑦バランス感覚が悪い、姿勢の保持が難しい、整理整頓ができな

い等の「不器用さ」(6の記述:8.1%)、⑧遅刻が多い、生活面がきちんとできない、授業中によく眠ってしまう等の「日常生活習慣の問題」(5の記述:6.8%)、⑨やる前に「だめだ、無理だから」と諦める、自力での解決力がない、やりたくないことはやらないという「問題への対応の困難さ」(3の記述:4.1%)、⑩自己肯定感が低い、自信がないという「自己評価の低さ」(2の記述:2.7%)、以上からなっていた。

学童期の発達障害児の「良いところ」に関しては、すべて肯定的側面に対する合計49(39.8%)の記述がなされていた(表2)。それらの内容は、①友達が好き、反抗はしない、他児に手をあげたりしない等の「情緒・対人関係」(20の記述:40.8%)、②お手伝いをするを好む、達成感があると喜ぶ、生き物が好きでよく世話をする等の「肯定的な行動」(16の記述:32.7%)、③興味を持ったことには意欲的に取り組む、将来の仕事について夢がある、自分が好きなことに集中できる等の「興味のあることに関する行動」(8の記述:16.3%)、④与えられた課題に真剣に取り組む、教科の学習の習得はできている、絵を描くのが得意等の「学習に関すること」(5の記述:10.2%)、以上からなっていた。

表1 学童期の発達障害児の障害特性に対する記述(計74の記述)

<p>① 不安定な行動:12の記述(16.2%)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・すぐ泣く ・行動が衝動的 ・すぐ帰ると言い出す ・いつもイライラしている ・調子の良い時と悪い時がはっきりしている ・まばたきのチックがある ・表情が暗くかたい ・口の中に紙を入れて長時間噛んでいる ・遊んでいるときにルールが守れず喧嘩になってしまう ・トイレなどの個室にこもる ・してはいけないことをしたら叱られないように嘘を積み重ねる ・興味の無いことについては極端に意欲が減退する
<p>② 状況に応じた行動の困難さ:12の記述(16.2%)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・余計な一言が多い ・その場の雰囲気を読めない ・話を集中して聞くのが苦手 ・休み時間の友達との会話など臨機応変な反応をすることが難しい ・集団行動が苦手 ・集団の中では指示を聞くことができない ・物事をどの程度理解できているのかが把握できない ・自分自身の行動を振り返るのが苦手 ・集中できる場面とできない場面の差が大きい ・進学や就職ができるのか ・受け入れられる指示と受け入れられない指示がある ・一人で過ごすことが多く集団に入ることができない
<p>③ 情緒・対人関係の問題:11の記述(14.9%)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人に対する執着がある ・目を合わさない ・叩いたり触ったりして手を出す ・視線がうまく合わない ・感情の表出がうまくできないため思いが相手に伝わりにくい ・特定の児童に対して攻撃的な口調・態度になる ・自分から友達に声をかけることが難しい ・他児と関わるのが難しい ・言葉で伝えることがうまくいかず、暴力的になることもある ・他児によくちょっかいを出す ・コミュニケーションがとりにくい
<p>④ 学習の困難さ:9の記述(12.2%)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・字形が整わない ・書く文字に特徴がある ・書いた文字を読み取ることができない ・学力がかなり低い ・宿題を忘れることが多い ・字を丁寧に書くことができない ・字を正しく書けず自分で読むことができないし書こうとしない ・低学力の問題がある ・計算や漢字の書き取り力がつかない
<p>⑤ こだわり行動:8の記述(10.8%)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・こだわりすぎるため融通が利かない ・こだわりが強い ・頑固 ・わがまま

<ul style="list-style-type: none"> ・大きな音が苦手 ・人のことが気になり「〇〇くんが△△した」と何度も言いにくる ・見通しと違うことがあるとパニックを起こす ・特定の事柄（列車・飛行機）に詳しすぎる ・気に入った作業になると時間になっても終了できない
<p>⑥ 注意の問題：6の記述（8.1%）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・落ち着きがなく多動 ・待つことができない ・集中力がなく手まぜばかりしている ・落ち着きがない ・前にスラスラできていたことがまったくできなくなることがある ・落ち着かず席にじっとしてられない
<p>⑦ 不器用さ：6の記述（8.1%）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バランス感覚が悪い ・姿勢の保持が難しい ・整理整頓ができない ・整理整頓できないためちらかる ・椅子にきちんと座ってられない ・姿勢の保持ができない
<p>⑧ 日常生活習慣の問題：5の記述（6.8%）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・遅刻が多い ・生活面がきちんとできない ・授業中によく眠ってしまう ・不要物を持ってくる ・風呂に入らない
<p>⑨ 問題への対応の困難さ：3の記述（4.1%）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・やる前に「だめだ、無理だから」と諦める ・自力での解決力がない ・やりたくないことはやらない
<p>⑩ 自己評価の低さ：2の記述（2.7%）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己肯定感が低い ・自信がない

表2 学童期の発達障害児の肯定的側面に対する記述（計49の記述）

<p>① 情緒・対人関係：20の記述（40.8%）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達が好き ・反抗はしない ・他児に手をあげたりしない ・よく反応する ・先生の言うことを聞く ・優しい（※3名が記述していた） ・想いを伝えようとする ・うまくいけばリーダー的存在にもなる ・よく話す ・幼い子供の面倒をみようとする ・他児にあわせて行動することはできる ・明るく笑顔で話をするができる ・マンツーマンだと落ち着く ・一対一でのかわりは割とうまくいく ・一対一ではある程度話も聞けるし理解もできる ・よく素直に報告にくる ・大人に対して人懐っこい ・他者に攻撃的ではない
<p>② 肯定的な行動：16の記述（32.7%）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お手伝いをすることを好む ・達成感があると喜ぶ ・生き物が好きでよく世話をする ・生き物を大切にする ・悪いことはしない ・言われたことを一生懸命にする ・褒められると俄然頑張る ・自分から仕事を引き受ける ・細かいところに気がつく ・素直な面もある ・少しうまくいくとそれをきっかけに頑張ることができる ・理解できれば決められたことを果たす ・聞くことよりも見ることが得意 ・頑張り屋 ・しなければいけないことにはちゃんとやろうという気持ち強い ・よく本を読む
<p>③ 興味のあることに関する行動：8の記述（16.3%）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・興味を持ったことには意欲的に取り組む ・将来の仕事について夢がある ・自分が好きなことに集中できる（※4名が記述していた）

・ある事柄について詳しく教えてくれる ・自由な発想をする

④ 学習に関すること：5の記述（10.2%）

・与えられた課題に真剣に取り組む ・教科の学習の習得はできている
・絵を描くのが得意 ・作業には黙々と取り組める ・興味を持つと誰よりも頑張る

IV 考察

学童期の発達障害児の行動に対する教師の記述について、「気になるところ」に関してはすべて障害特性についてであった。「良いところ」に関しては子供らしいところや長所についてであった。障害特性に関する記述は全体の6割程度であったため、教師は発達障害児の障害特性に関心を向けていることが窺える。

現在、発達障害の障害特性については次のように捉えられている。

アスペルガー障害の場合、言語的コミュニケーションが比較的良好なために発達障害の診断がなされず、適切な療育を受けないままコミュニケーションや人間関係の問題で苦しむケースが多く見られる⁴⁾。また、言語機能や認知機能のレベルが高いアスペルガー障害は、社会的場面から一部を知識として切り出し、それを使って社会的な行動を果たそうとする。このように知識が拡大されないまま日常の行動パターンに組み込まれてしまうと、そのパターン以外の事態では強度の不安に陥ることになってしまう⁵⁾。

高機能自閉症の場合は、知能検査によるIQが高くても、状況判断や環境からの情報を処理していく能力については弱いとされている⁶⁾。

注意欠陥多動性障害（ADHD）児は、他者とコミュニケーションを持続してとることが困難である。周囲からの叱責、否定的な評価が積み重なっていくと子どもは自己不全感を持つようになり、情緒不安定や問題行動という不適応症状を示すようになる⁷⁾。特に、攻撃的行動は対人行動における顕著な問題となっている⁸⁾。

学習障害については、基本的には全般的な知的発達に遅れはないが、聞く・話す・読む・書く・計算するまたは推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な様態を示すものとされている⁹⁾。

学童期の発達障害児の障害特性について教師は、「不安定な行動」、「状況に応じた行動の困難さ」、「情緒・対人関係の問題」、「学習の困難さ」、「こだわり行動」、「注意の問題」、「不器用さ」、「日常生活習慣の問題」、「問題への対応の困難さ」、「自己評価の低さ」に関心を向けていた。これらは、先述した発達障害児の障害特性に関する内容であるため、教師は発達障害児の障害特性を全般的に捉えようとしていることを表していると考えられる。

学童期の発達障害児に対する運動教室の取り組みにおいて、「コミュニケーションが苦手な児童も、学生に囲まれて過ごす中で徐々に慣れていった。学生は、児童のペースに合わせて活動したり、「すごいね」の声かけ、ボディタッチ、ハイタッチ等、児童の行動を褒めて認めたりということを意識的に行っていた。これにより、児童が生き生きとして、いろいろな活動に積極的に参加する様子が見られた。はじめのうちは、ためらいや照れが見られた児童も、最終的には楽しむことができていた。」とされている¹⁰⁾。また、発達障害について、長期に渡って比較的うまくいっている例を見ると、低年齢では家族や先生らが子どもの特徴を知り、ある程度あるがままに受け入れて、さらに対応を考えて実行している場合であるとの知見がある¹¹⁾。

学童期の発達障害児の「良いところ」に関しては、「情緒・対人関係」、「肯定的な行動」、「興味のある

ことに関する行動」、及び「学習に関すること」について肯定的な記述がなされていた。このため、教師は発達障害児に対して、受容的に接することや長所を見出すことを心がけながら教育に取り組んでいるものと推察される。

教師集団は、他の職場と違って教師同士に職務上の緊密な結びつきが少なく、教師個々の独立性と分離性が保たれているという特徴をもつとされる¹²⁾。すなわち、教師個々の自立性が保障され、学級経営や教科指導に関しては、教師の専門的な能力に基づいた独自性が尊重されている。このような職種上の特徴をもつことから、一般に教師は援助を受けることに慣れていないため、ともすれば一人で問題を抱え込んでしまいやすいとされている¹³⁾。したがって、発達障害児に対する教育を充実させるためには、教師同士で発達障害児をどのように捉えているのかを検討することが不可欠と考えられる。

V 結 論

本研究において、教師は学童期の発達障害児に対して、障害特性に関心を向けていること、障害特性を全般的に捉えようとしていること、及び受容的に接したり長所を見出したりするように心がけながら教育に取り組んでいることが考察された。また、発達障害児に対する教育を充実させるためには、教師同士で発達障害児に対する見方を検討する必要があると考えた。

謝 辞

本研究にご協力いただきました皆様に深く感謝致します。

引用文献

- 1) 文部科学省 通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国調査 2002
- 2) 文部科学省 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果 2012
- 3) 教育新聞 2012年12月17日号 社説：発達障害への対応で 個別的教育支援の充実を 2012
- 4) 井上亮子ら 発達障害の診断と評価 月刊保団連 729 37-40 2002
- 5) 中根晃 脳のサイエンスから見た高機能自閉症と Asperger 障害 自閉症スペクトラム研究 1 15-24 2002
- 6) 萩原はるみ 高機能自閉症の幼稚園における援助と適応 名古屋柳城短期大学紀要 25 129-139 2003
- 7) 平林伸一 注意欠陥／多動性障害 治療増刊号 86 448-451 2004
- 8) Hinshaw, S. P. On the distinction between attentional deficits/hyperactivity and conduct problems/aggression child psychopathology. Psychological Bulletin, 101 443-463 1987
- 9) 文部省 調査研究協力者会議最終報告「学習障害児に対する指導について」 1999
- 10) 中島範子・松山郁夫・坂元康成・芳野正昭 運動処方を取り入れた発達障害児のサマースクールの実践 佐賀大学教育実践研究 28 103-114 2012
- 11) 加藤醇子 医学的立場からみた効果ある支援について—軽度発達障害において— LD 研究 14(1) 4-11 2005
- 12) 淵上克義 学校が変わる心理学～学校改善のために～ ナカニシヤ出版 1995
- 13) 大山卓・唐津愛子 特別支援教育におけるコンサルテーションについての一考察～アスペルガー障害の子どもへの環境調整による不適応改善と描画の変化について～ 愛知教育大学教育実践総合センター紀要

